多彩な名と多様性について：つれづれなるままに（2019/7/2）

TI

１．多彩な表現言葉

7/2 朝刊（朝日新聞）の「リレーおぴにおん：雨にうたえば」欄に、詩人の高橋順子さん「季節で　降り方で　多彩な名」が載っていました。この梅雨季節に的を射た記事であり、「いいね！」と反応しました。

雨には、春夏秋冬の季節ごとに、また朝昼夜の時間別に、あるいは雨の強弱や降り方ごとに微妙に異なる表現が日本語には数多くあるという。彼女には、20 年近く前に写真家の佐藤秀明さんとの共著「雨の名前」があり、そこには 422 に及ぶ日本語の雨の表現が収められているという。その欄には、「ある学者がアフリカのサバンナでは緑が 50 通り、北極圏では雪の色が 30 通りにも識別されていて、それは「（そこに住む人々が）自然に命を預けているからだ」と語っていたことも載っていました。日本語に雨の言葉が多いのもそんな面があるのでしょうと。

多彩な名の多さで北極圏の「雪の色」を例に挙げるなら、日本の「雪」も挙げたい。新沼謙冶が唄う「津軽恋女」(作詞：久仁京介、作曲：大倉百人)の歌詞に、「津軽には七つの雪がふるとか♪～こな雪　つぶ雪　わた雪　ざらめ雪　みず雪　かた雪　春待つ氷雪」とあります（Ref.1）。その他、イルカの唄う「なごり雪」（作詞、作曲：伊勢正三）もあります（Ref.2）。なごり雪（名残雪）は、春になってから冬の名残に降る雪であり、同じような時候に降る雪として「忘れ雪（私を忘れないでねといっているかのように冬の最後または春先にすぐ消え去っていく雪）」もあります。雪には、そのほか多くの呼び名があり、それらを紹介したブログ記事（Ref.3）があります。

一つのものには静と動の観察視点があり、見るときの感情によっても呼び名が変わり、日本語はとても美しいと思います。

注：雪には降雪と積雪があり、「津軽恋女」の７つの雪の内、実際に降る降雪は、こな雪（粉雪）、つぶ雪（粒雪）、わた雪（綿雪）、みず雪（水雪）の４つです。残りの３つの「ざらめ雪（粗目雪）、かた雪（固雪）、氷雪」は、積雪の状態を表す雪に当たります。

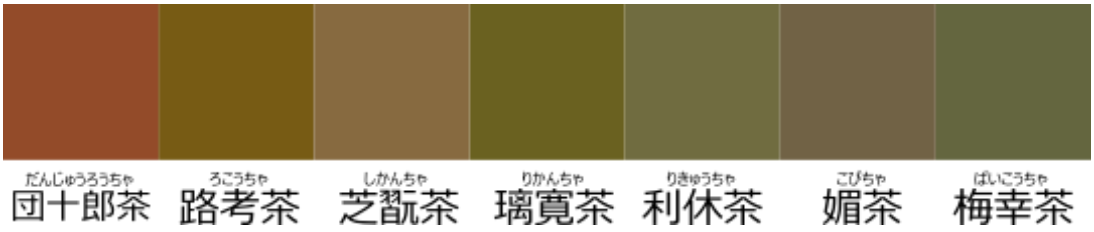
海の漁師さん言葉にも、潮や風向きに関して多くの識別言葉があります。やはり、海に命を預けているからに他ならないからでしょう。

色の識別数の多さに関しては、日本人も負けてはいません。四十八茶百鼠（しじゅうはっちゃ ひゃくねずみ）という言葉があります（HP 記事 2018-09-05：虹、色と色名、Ref.4）。江戸時代後期、町人や商人は徐々に生活が豊かになってきて、皆、良い物を着たい、きれいな色の物を着たいと思う様になりました。ところが、幕府は「庶民は贅沢をしては駄目、質素に」と考え、贅沢禁止法、いわゆる奢侈禁止令（しゃしきんしれい）を発令しました。そして、庶民の「着物の色・柄・生地」にまでも細かく規定を設けました。当時、着物に関して庶民が身につけられる物は、素材は「麻」または「綿」、色は「茶色」「鼠色」「藍色（納戸色）」のみと限定されてしまいました。そこで、江戸の職人さんがあれやこれやで試行錯誤して色の中に微妙な色調を工夫して着物を染め上げ、多くのお洒落な庶民達の欲求で生まれたのが「四十八茶百鼠」という色合いです。特に茶系統と鼠

系統の多彩な色合いとその都度つけられる新しい「色名」が次々と生まれました。決して華やかではないのですが、「粋」で洗練された日本の色彩文化の誕生でした。

下記は「四十八茶百鼠」の代表的な「茶」と「鼠」 のカラーバリエーションです。同じ色名でも色に幅があり、複数の色見本を参考にしながらだいたいこのへんかなという落としどころで採用されたものです。「四十八茶百鼠」の四十八や百は色数ではありません。多色と云う意味です。茶系統も鼠系統も実際には、“100 以上の色名”がありますが、言葉のゴロ遊びで「四十八茶百鼠」と言われました。その微妙な色彩の違いを当時の人々は見極め、楽しんでいたのは大変な驚きです。

茶系の色



鼠色系の色

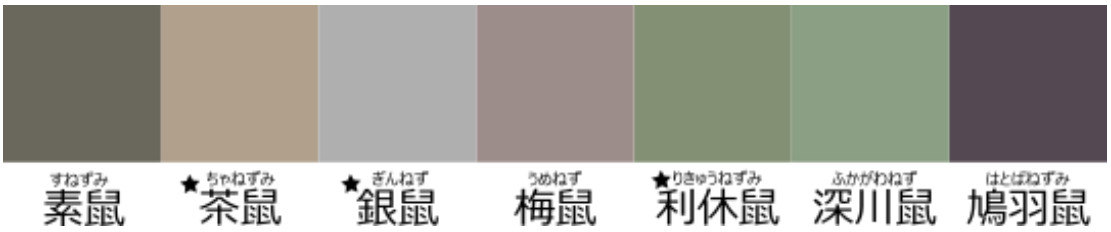


図 1　四十八茶百鼠の茶系と鼠色系のカラーバリエーション

虹の色数に関する話題です。アメリカやイギリスでは、一般的に虹は 6 色といわれていて、藍色を区別しません。ドイツでは、さらに橙色も区別しないので５色（赤・黄・緑・青・紫）となっています。アフリカでは、暖色と寒色のみで２色という部族もあるそうです。大事なポイントは、“虹の色が何色に見えるのかは、科学の問題ではなく、文化の問題”なのです。つまり、何色と見るかということなのです（HP 記事 2018-09-05：虹、色と色名）。

虹といえば、レインボーフラッグを想起させます。性的少数者（LGBT）の尊厳とその社会運動を象徴する旗です。現在、最も広く使われているバージョンは６色です（右図参照）。

図２　レインボーフラッグ（from ウィキペディア）

２．多様性

「一つのことの多彩な名」からは、「人の多様性」が連想されます。その「多様性の尊重」が取り上げられる時、金子みすゞの詩「私と小鳥と鈴と」の「鈴と、小鳥と、それから私、みんなちがって、みんないい」がよく引用されます。この世にあるものは、誰一人、なに一つ、同じものはなく、

だからこそみんなすばらしい、というのです。金子みすゞ（1903 年（明治 36 年）- 1930 年（昭和５年））は、山口県長門市の仙崎に生まれ育ち、２６年の生涯で500 余編の詩を残しています。かまぼこで知られる仙崎は、日本海に突き出した青海島に守られた良港で、大正期頃までは捕鯨も行われていました。時に子連れのクジラも取れ、村では戒名をつけてクジラを葬ったそうです。

「朝やけ小やけだ　大漁（たいりょう）だ」で始まるみすゞの「大漁」という詩があります。「大羽鰮（おおばいわし）の大漁だ。浜（はま）はまつりようだけど　海のなかでは　何万（なんまん）の　鰮（いわし）のとむらい　するだろう」とつづられています。また、「お魚」の詩では、「海の魚はかわいそう。 お米は人につくられる、牛は牧場でかわれてる、こいもお池でふをもらう。　けれども海のお魚は　なんにも世話にならないし　いたずら一つしないのに　こうしてわたしに食べられる。　ほんとに魚はかわいそう。」とつづられています。

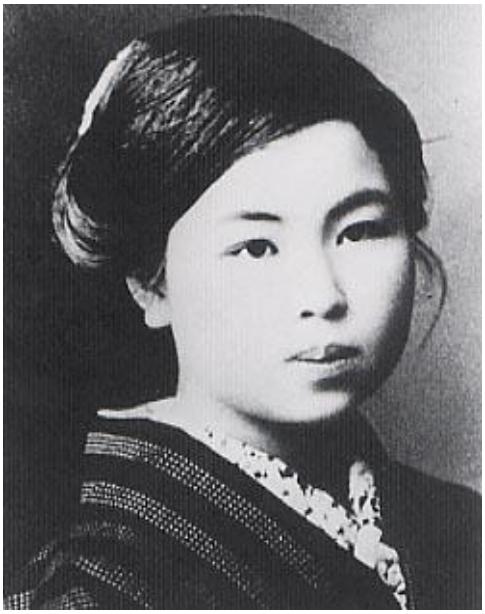


図３　金子みすゞ：写真館にて撮影（20 歳）（from ウィキペディア）

彼女は、なんと、自然と共に生き、小さな命を慈しむ、なんと優しいまなざしの方なのだろうと思います。仙崎には、金子みすゞが３歳から２０歳まで生活した書店「金子文英堂」を再現した「金子みすゞ記念館」があります。一度は訪れてみたいと思っています。

前述の性的少数者（LGBT）の尊厳の社会的運動も、人の多様性の尊重に関わるものです。米国では２０１５年から男女別トイレの段階的廃止が始まっています。日本でも今年２０１９年４月に、北海道函館市の市役所本庁舎のトイレを「多目的トイレ」から「だれでもトイレ」に名称変更するニュースが流れました。私は、現社会状況から直ぐにこれらに賛成するものではありません。賛成しないからと言って、多様性を否定するものでもないし、まして、人の違いを認め合う社会を否定するものでもありません。

多様化の必要性、人の違いを認め合う社会の構築が叫ばれて久しいのに、なぜ戦争がなくなっていかないのだろう。なぜ、皆がより幸せを感じた生活ができるようになっていかないのでしょうか？政治が効率よく正しく機能していないからだと思われます。

参考文献

Ref.1 津軽恋女 20170405：https://www.youtube.com/watch?v=Sbsnlt1VV4g

Ref.2 なごり雪 - イルカ：https://www.youtube.com/watch?v=eliU3I2nDJA

Ref.3 風に吹かれて旅するブログ（記念日＆ハッピートーク）：http://kihaseason2015.hatenablog.com/entry/2015/02/12/223004

Ref.4 デザイン雑学「四十八茶百鼠」：http://ggdesign.blog48.fc2.com/blog-entry-69.html